

思
い
出
す
人
々



西山 厚 全24回

第10回 【父】

私が俳句に興味をもったのは小学生の時だった。

くろがねの秋の風鈴鳴りにけり

飯田蛇笏だこくのこの句を父はとても好きだったようで、よくつぶやいていた。

「くろがね」が何なのか、当時の私にはわからなかった。黒い金属だろうと想像した。くろがねは鉄、あの南部鉄器みたいなものだと思ったのは、ずつとこのことだった。風鈴が夏の季語であるのも知らなかった。だから「秋の」が付いているのだが、そもそも季語というものを知らなかった。飯田蛇笏の句と聞いたが、飯田蛇笏を知らなかった。どんな人なのか、調べることがなかった。

しかし、この句は、幼い私の心をとらえた。

重そうな黒い金属の風鈴が、すでに強さを失った秋の日差しのないなかで、りと鳴った。それだけだが。

芋の露連山影れんざんを正しうす

蛇笏のこの句も父は口にした。こちらの意味はまったくわからなかったが、「れんざん」の音が凜々しく、姿勢を正したい気分になったことを覚えている。